

東アジア交流研修報告書

- ◆日 程 平成28年10月1日（土）～3日（月）
- ◆場 所 韓国 昌原・釜山
- ◆参加者 【NPOSTARS】太田・越川・砂山・曹・麻生・軀川・春田・高田・片根

10/1 PM 施設見学 〈母子保護施設〉センミョント（命の場）

未婚の妊婦や母子が入所して、養育支援や自立支援を行なう施設。自立支援では、いずれここでの活動を通して地域で生活できることを目標としている。例えば、入所者がバリスタの資格を取得し、敷地内にあるコーヒーショップで就労をするなどの取り組みを行なっている。養育支援としては、養育スキルの向上を目標としている。入所者の約6割が10代、残りの4割が20代である。見学時も、10代と思われる若いお母さんが赤ちゃんを抱っこしたり、おむつを交換していたりする姿が見られ、入所者同士が助け合いながら生活していた。



10/2 AM 発題と討議 ～児童の自立支援とアフター支援～



- ①『韓国における退所後児童の自立支援』グアンドンス氏（ボリス園事務局長）
- ②『児童養護施設のアフターケアの現状』高田牧子氏（東京恵明学園）
- ③質疑応答・意見交換
- ④まとめ ジョンミンファ氏（慶南社会福祉士協会副会長）

「国が課題に気づき少しずつ変わろうとする姿は良い事だ」

「施設で暮らす子どもの心の内に思いを馳せ、その心とつながることが大切である」

10/2 PM 施設見学 〈児童福祉施設〉パンジュウォン（方舟園）

戦災孤児を預かる乳幼児施設として開設、2000年度に制度が変わって学童以上の子どもたちも生活をする施設となった。現在の入所理由は、親の不在、家庭内の問題が主な理由となっているとのこと。



施設で生活している子どもたちの生活水準（衣・食・住）は一般家庭より良い状態にあると思われるが、与えられることがあたりまえになりすぎて、自分の意志で勉強や仕事に取り組めず、無気力な状況にあることが課題となっているとのこと。その課題にいかに対処していくかということを検討されたプログラムを実施しており、今後その成果を検証していくとのことだった。

また、自立した児童や養子縁組に出した全ての児童と連絡が取れているとのこと。制度や仕組みとしての繋がりでなく、人と人としてしっかりと繋がりをもち、支援していることを強く感じた。

＜所感＞

交流研修を経て、日韓両国の実務者が認識している福祉的課題にはいくつもの共通項があることに気付きました。これは、今後の交流研修がさらに継続、発展していくであろうことを意味していると考えます。互いに社会的養護のもとにある子どもたちの幸せを願い、その最善の利益の実現のために工夫を重ねています。そしてこうした実践が、良い制度につながることを共通認識することが出来ました。両国の実務者が情報を交換し、学び合う事は、社会的養護のもとに暮らす子どもたちや社会的養護での暮らしを経験した退所者等の自立を目指した支援につながるとともに、それを担う人材の育成に資する機会となりました。